寺報
清風
第173号
発行人
伊勢　徳
発行所
真宗大谷派　称念寺
知立市新地町西新地65
ＴＥＬ〈0566〉83-8888
ＦＡＸ（0566）84-1262
www.shounenji.com
印刷
有限会社　クシロ印刷

今生の深淵

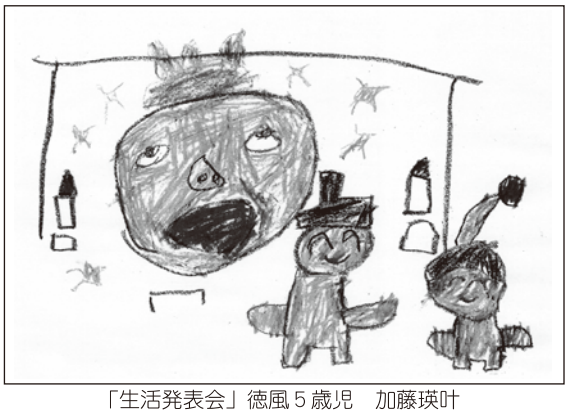
彼岸の時節には先祖と、先に命を終えた家族のご恩を想う。仏教は、私達の今生（こんじょう）のいのちの深さとして、生命の繋がりとそのご縁を、法要の儀式と共に繰り返し伝えてきた。父、母の両親二人が出会い、私が生まれてきた。同様に祖父母が四人、曾祖父母が八人。続く十六人の高祖父母、三十二人とネズミ算式に増えていき、十代辿（たど）れば先祖の数は千人以上となり、二十代では百万人を超える。厳然たる事実として、これら人々の一人でも欠けることがあれば、私が私として生を受けることはなかった。だから法事は近しい故人の供養が主となるが、本来は見知らぬ先祖も平等に値する。人生一代の期間を三十年とすると、二十世代でも僅（わず）か六百年前、室町時代にあたるも当時、現在の中町にあった称念寺の歴史の方がまだ古い。命とは、途絶えたことのない、連綿とバトンタッチされてきた遺伝子の軌跡でもあり、それは縄文時代、石器時代へと連（つら）なり、四百万年前にアフリカに誕生した人類の第一歩が、どの人にも内在するのである。

更にヒトの歴史にも前世、つまり始まりの前がある。キリスト教典ではアダムとイブは神の創造とされ、ダーウィンの『種の起源』との矛盾が論争となってきたが、現代では「分子生物学」という学問で生命の一端が解明されている。今から四十六億年前に真空の宇宙に地球という惑星が形作られ、表面に覆われた高温のマグマが徐々に冷え雨が降り、二億年かけて海ができていった。その後、太陽との距離が最適に環境に作用し、四十億年前に原始的な生命が水中に誕生する。これが我々の祖先だ。興味深いのは「分子系統学」という生物の枝分かれ研究で、進化論は認めざるを得ないが人間特有の傲慢でより昔にと、二千万年前には猿とは異なる高等生物ヒトに進化したとされてきたが、近年それが誤りであったと明らかになっている。ヒトと、チンパンジーやゴリラの共通祖先は約六百万年前に生きていた。ヒトと象の共通祖先は九千万年前に、ヒトと蝶の共通祖先は五億八千万年前に、ヒトとキノコの共通祖先は十二億年前に生きていたと云う。なんと私の嫌いな椎茸も、元々はかつての私と同じ生物であったのだ。先祖とは、仏壇の

春彼岸法要

3月20日（水・祝）　午前8時・10時（二座）

法話　沙加戸（さかど）　弘（ひろむ）師（大谷大学名誉教授）



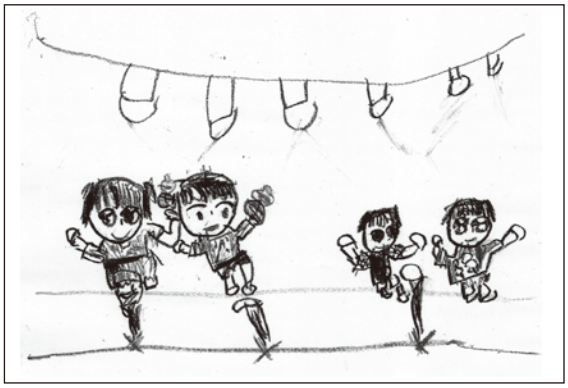
「生活発表会」徳風５歳児　加藤瑛叶

「できる」こと、「する」ことに重きが置かれ、「ある」ことが放棄されている　四衢亮

位牌どうこうで完結するものではないのだ。

今から約二千五百年前、インドのお釈迦さまは「縁起」に目覚められた。この気付きを「悟り」とし、目覚めた者という意味の「ブッダ」となられたことが仏教の幕開けであった。縁起とは「全ての事物には必ず因（原因）と縁（条件）がある」ということ。人工知能が天才的な人間の脳以上に働く文明社会にあって、最先端の科学とも矛盾しない「真理」である。この縁について考えるとき、私達が生まれてから様々な境遇や条件、選択のなか分岐点が無数にあり、今の現実とは全く違う人生となっていた可能性が無限にあったように、今に至る命が絶える縁も無数にあった。だからこそ今、ここに私が在るということが文字通り有り難い、在ることが究極に奇跡的な果（結果）なのである。迷い悩み王位を捨て、苦行の末この事に気が付いたゴータマ・シッダールタの人生観は、天地が引っ繰り返るほどの衝撃を受けたことは想像に難くない。『歎異抄』にも親鸞聖人の「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」という言葉があるが、こうした「いのちの感覚」は大乗仏教の根底に響流する精神である。けれども、宇宙論などと同様、その数量や規模が並外れて広大過ぎて、実感を伴わないことが多いのだが先日、京都の東本願寺でご一緒させていただいた、ある先輩僧侶の法話で腑に落ちた。

その方は、九州の寺の生まれで、三人兄弟の次男として生を受けた。実家の寺を継いだ長兄が、膵臓ガンとなり一年程で亡くなった。享年六十三歳、夢もやり残しもあったろう、けれど命を終えなければならなかった。そして命終の際、「長い旅をして自らの愚かさがはっきりした」という内容の句を残された。その先輩は、自身が兄の寿命をとうに越え七十二歳になって尚「もう人生が終わるのか、このままでは死ねない」という思いが心中にあり何故、より短命であった故人が「長い旅」と表現したのか、しばらくの間わからなかったと云う。だが、命の背景に頷けたのだ、と。縦軸でなく水平に眺めると良いと示唆された。確かに、過去に遡ったところでひい爺さん辺りで、そも名前や人柄、職業すら曖昧であろう。だが二十代前の先祖の百万人を横方向に、現代の百万都市に見立て擬えるなら、そこに生きる人々全てが、私がこれまで生まれ変わり死に変わりしてきた相なのだ、と。幸せな人もそうでない人も、いつも身勝手で腹立たしい人も病気の人も、或いはスポーツに秀でた人や政治家や労働者、金持ちに乞食、戦闘員やいじめっ子、間違いを犯した罪人もいる。希望や怒り、愛や憎しみまで混沌とする、山の様な人間の業が全て、自身のいのちが経巡った背景と同一なのだ。蓮如上人の『御文』にある「後生の一大事」とは、死後に極楽浄土へ往生するか否かということでなく、この命の歩みの最後の一生に「念仏申せ」といただいたか、問われているのだと諭された。



「生活発表会」徳風５歳児　小嶋ひより

仏教の経典は全て「如是我聞」という言葉から始まっている。「私は仏陀の教えをこのように聞きました」とは、偉人たる釈迦が説いた教えだから有り難いのでない、仏の願いが私にまで聞こえてきたことが尊いのである。私自身の諸々の苦悩や困難も、「なんで私がこれほど苦労しなければならないのか」という不満を抱くまま、いち真宗門徒として、他の誰でもなく自分に与えられた丁寧に向き合うべき役割だとも感じられる今

いつも浄土がここにあるから、私たちは穢土を生きられる　高柳正裕

仏典マンガ

絵：小川ゆきえ〈60〉

仏さまのおしえ

出典は『パンチャントラ』 インドの説話集、世界最古の物語集です。

セミは夏を知らない

毎朝７時から朝の勤行「おあさじ」がございます。どなたも気軽に参詣ください。

日この頃である。しかしながら、「生かされている」との教えを聴聞してハッとした驚きと慙愧、自己中心の闇が信心に転ずるのは、幾多の先達と同じく私も亦（また）「煩悩のまま思い通りにならない人生を、老病死するいのちを生きる衆生（しゅじょう）」という帰り依る処に、そっと触れさせていただくからなのであろう。

［文章　若院］

若院の伝道掲示板

●私が正しい
思う善人ほど
争い絶えず

●戦争を見て
日本は平和だと
喜ぶ人の罪

●世の現実に
人間の愚かさが
具現する

●過ぎる日々
あと何度その人に
会えるだろう

●自己中心
近くで泣いている
人が居る

●常日頃
これが最後と
思うべし

■講師紹介

沙加戸弘（さかどひろむ）氏
昭和21年生まれ。滋賀大学教育学部を卒業後、同県公立学校の教員を経て、後に宗門の大谷大学で教鞭をとる。国文学と仏教文化に造詣が深い。大谷大学名誉教授。著書『親鸞聖人御絵伝を読み解く』（法藏館出版）他。昨年春に来寺された際の、釈迦の出世から法然誕生までのご法話に引き続き、その後の仏教についてお話いただきます。共に聴聞にお越しください。

■年忌（法事）一覧

自宅の繰り出し位牌、過去帳等を確認いたしましょう。

1周忌・・・令和5年逝去
3回忌・・・令和4年亡
7回忌・・・平成30年亡
13回忌・・・平成24年亡
17回忌・・・平成20年亡
23回忌・・・平成14年亡
27回忌・・・平成10年亡
33回忌・・・平成4年亡
37回忌・・・昭和63年亡
43回忌・・・昭和57年亡
47回忌・・・昭和53年亡
50回忌・・・昭和50年亡
100回忌・・・大正14年亡

■娑婆の縁尽きて

令和5年

荒木　一好　83　東栄　11・3
永田　悦子　98　内幸町　・6
杉浦　康敬　96　上重原　・8
伊藤　孝夫　74　西町　・20
永田　孝一　77　新林　・30
加藤　綾子　92　山屋敷　12・22
山本のぶ江　93　新林　・24

令和6年

小鯛寿和乃　86　長田　1・5
石原　續夫　100　山町　・22
荒木　政夫　99　山屋敷　・23
永井　将人　77　山町　2・4

■祠堂・永代経のご志納

水野敏明様　鳥居
永田千春様　内幸町
公文章子様　山町

■住職より

□昭和48年7月に前住職（父）は還浄されました。よって私が第24世の住持として勤めさせていただきました。爾来50年。本年4月9日午前10時から、本山・東本願寺の大師堂に於いての『住職勤続50年者』の儀式・集いの案内状が届きました。全国にある約8千ヵ寺のうち対象となる僧侶が27名とのこと、出席の旨を返信しました。

□母　チカ子さんの命日は2月、27日に25年目の祥月を勤修す。父、研学さんのご命日は7月。過日50回忌法要を勤め上げたが、私の余命があれば以後も祥月法要を、毎年7月のご命日、27日に務めさせていただく報恩の法座といたします。

□本年末までの行事の中、細やかな『住職継承ご報告法要』をさせていただく予定です。

◆相続講

日時　5月20日（月）
午前10時
法話　木村　斉　師
幡豆・福泉寺

◆日曜おあさじ特別法話

日時　6月23日（日）
午前7時
お話　蓮岡　修　師
絵本屋『きんだあらんど』代表

春の訪れとともに、お彼岸の法要にて、皆様方のご参詣をお待ちしています。